
【東方×仮面ライダー】オールキャラスーパースピンオフ

バームクーヘン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【東方×仮面ライダー】オールキャラクタースピンオフ

【Nコード】

N0623K

【作者名】

バームクーヘン

【あらすじ】

平成ライダー十周年だからってここまでやっていいのか！？で有名なオールライダースーパー اسپिनオフが東方とコラボして復活！！夢のコラボを見逃すな！

訳あって打ち切りです。
すみません。

予告編（前書き）

短編集になると思います。スーパースピノフ同様、息抜きに読んで頂くのがいいかもしれません。

予告編

平成ライダー十周年だからってここまでやっていいのか！？で有名なオールライダー・スーパー・スピンオフが東方とコラボして復活！！夢の共演を見逃すな！！

「司会を任せました。森近りんの・・・」

「その命、神に返しなさい！」

「ライダーとして譲る訳にはいかん。1番のファイズアクセルフォームだ」

「簡単な問題だね。答えはXライダーだ」

「既にそっくりさんがいるって事はメリーは後一人いるわね」

「蓮子、駄目なの？チャーハンってそんなに駄目なの？」

「いよいよ執筆開始！」

「みみみみ、みつてね」。

File・01 陳情、秘封新作伝説！

「続きが無いの！」

「チャーハン、蓮根、もやし。どうしようもない連中だね」
「「「なまこは黙ってる」「」」

File・01 陳情、秘封新作伝説！

File・01 陳情、秘封新作伝説！

「さあ、始めました、オールキャラスーパースピンオフ。実況を任せました森近霖之助で」

「その命、神に返しなさい！解説の名護啓介だ」

霖之助が喋っている所に名護が邪魔をいれ、霖之助は思わず溜息を付く。

「大丈夫かこの人・・・おや、メインの四人が何かしている様です」

- 光写真館 -

「だからよく考えてくれマエリベリー君。君の名前には重大な事実が隠されてる」

「・・・そんなこと言われても私知らないわよ」

海東大樹、門矢士、宇佐見蓮子、マエリベリー・ハーンの四人が何やらワイワイ話していた。

どうやら海東が話の発端の様だ。

「仕方ないね。いいかい、つかれんこ、君達はマエリベリー・ハーンと聞いて何を思い浮かべる？」

「勝手に略するな」

「えーっと・・・フビライ・ハン！」

「お前は本当に駄目だな、宇佐見。チンギス・ハンだろ」

「そう！フビライ・ハンだよ」

「無視か・・・」

士の呟きなど誰も気にせず、海東は話を勝手に進めていく。

「それで、フビライ・ハンと聞いて何か連想するはずだ」

「何かあったか？」

「全然分かんない」

士と蓮子は顔を近づけヒソヒソ会話する。

「仕方がないね、この二人は・・・じゃあ答えを言うよ。正解は・・・チャーハンだ！」

「・・・ハア？」

「ハアじゃない。誰もがフビライ・ハンと聞いてエビフライチャーハンを思い浮かべたはずだ」

「お前は小学生か・・・」

「うるさいね。もやしは黙っててくれないか」

「もや・・・!？」

士の顔が引き攣り、隣の蓮子が笑いを堪えながら士を指差す。

「ハハハ・・・もつもやしって・・・」

「そういうお前はうさ耳蓮根だろうが」

「っ！言ったわねもやし」

「何だ文句あるか？」

蓮子が士につかみ掛かり士も同様につかみ掛かる。
それを仲裁するためにメリーが二人に話し掛ける。

「まあまあ、二人とも落ち着きなさいって」

「うるさい。チャーハン」

「チャ・・・」

メリーはショックで机にうなだれる。

それを見て、海東がニヤニヤしながら三人に言う。

「ハハハ、チャーハン、蓮根、もやし。どうしようもない連中だね」

「「「なまこは黙ってる!」「」」

「はい。ごめんなさい」

三人の反撃を喰らい、今度は海東がうなだれる。

・スタジオ・

「ちょっと四人共、話がズレてますよ。真面目にやってくださいよ」
スタジオにいる霖之助が四人に注意をする。

・光写真館・

「うるさいメガネだな。それより宇佐見。今回はお前から何かある
ようだな」

士が蓮子に話し掛ける。すると、蓮子が机をバンと叩き、立ち上がる。

「ええ、とても大事な話よ」

「何だ？」

「続きが無いの! 私達秘封倶楽部の! 新作が!」

「・・・またどうでもいい事を」

「どうでもいい事ないわ！私達にとっては重大な問題よ！ねえメリー」

蓮子はメリーに同意を求める。

「いや、私は別にどうでもいいわよ？」

しかしメリーの反応は冷たかった。蓮子はそれが気に入らないのか、ムツとした表情でドスンと座る。

「大体ね、おかしいのよ。そりゃあZ。Nさんだつてそんなホイホイ新作作れないだらうけど、ひど過ぎるわ！数年間全く音沙汰無しだなんて！

大体ダブルスポイラーって何よ！仮面ライダーWと被ってんじやない！」

「いや、全然被ってねーよ」

「あー、せちがらい世の中になったもんねー」「まあ、音楽CD出すのも大変なもの」

「それはそうだけどさー・・・あーあ、秘封の新作作って貰うよう頼もつかしら」

「これは・・・」

土が呟いた瞬間、海東、蓮子、メリーの三人が土の周囲に薔薇を持つて行き、土は薔薇を自分の前に翳す。

「陳情、だな・・・」

- スタジオ -

「東方projectはZ。N氏がほぼ一人で制作している以上、気軽に新作が作れないのが現状だ。しかし、皆が諦めなければいつか夢は叶う。全員で陳情しなさい!」

「何いい話で終わらせようとしてんですか。ていうかオチはアレでいいんですか?」

File・02 考察、夢の幻想郷

「本当何でこんなに偉そうにしてんだろうねコイツ」

「俺はストーリーでこけたから大丈夫だ」

「蓮子、冷静になって。私達狩られる側よ」

File・02 考察、夢の幻想郷（前書き）

ちょっと遅れました。すいません。

それでは本編をどうぞー

File・02 考察、夢の幻想郷

「『それだけで罪なのです』だって、何か大ナマズ以下の奴が偉そうにしてんですけど」

「いや、人気投票の件なら、お前も偉そうに言えないぞ」

士が蓮子にツツコミを入れる。蓮子の手には一冊の本が握られている。

- スタジオ -

「あれは東方儚月抄ですね」

「ああ、漫画、小説と発売された物だ」

「何やら議論が白熱しているみたいですね」

「無理もない。むしろ地上に生きる者としてあの姉妹には断固反対しなければ」

「いや、でもですね、月の民からしたらやはり地上は汚れた場所ですから仕方ないのでは」

「・・・君とはやはり話が合わない。次回から相方を呼ぶから君はもう来なくていい」

「ちょ、何言ってるんですか貴方！僕は認めませんよ！」

- 光写真館 -

「おい宇佐見、お前ポップコーンは何が好きだ」

「断然塩ね」

「分かってるな。やつは塩だな」

「いや、土。バターだろ？」

「大樹も何言ってるのよ。時代はキャラメルよ」

「メリーこそ何言ってるのよ」

- スタジオ -

「ちょっとそこの四人！タイトル関係なくなってきたんじゃないですか！いい加減真面目にやって下さいよ！」

- 光写真館 -

「うるさいメガネだな。しかし、幻想郷について何を語ったらいい

んだ」

「とりあえず幻想郷がどんな所か伝えればいいんじゃない？」

「お、メリーナイスアイデア」

「じゃあ僕が一言で表してあげよう」

「お、自信があるようだな、海東」

「当然さ。では、皆見たまえ」

海東はあらかじめ用意しておいたフリップを裏返す。

「化け物の巣窟」

その場にいる全員が一斉に机に頭をぶつける。

「どうしたんだい？僕は嘘はついてないよ」

「お前はもつとオブラートに包んで言えないのか」

士が呆れるかの様に頭を手で抑える。

「だってどんな外見してても結局はあいつら皆化け物だよ？」

「うーん、一理あるわね。あんな外見でも多くはチートなもの」

メリーが複雑そうに肯定する。

「チートといえば士、あんたも依姫並のチートよね」

蓮子がニヤニヤしながら士に話し掛ける。それに対し士は、いかにも嫌そうに答える。

「まさか俺がそいつと同類だとも言いたいんじゃないだろうな。言つとくが、俺はこういう偉そうな奴が一番嫌いなんだ」

「でも結構似てるわね。他者の力を引き出せたり」

「結局はどっちもチート使いつて事さ」

「チートキャラって嫌われるわよ。士、ドンマイ」

蓮子は士の肩にポン、と手を置く。

「お前ら人を勝手に人気の無い残念なキャラにするな。

大体冷静に考えろ。あいつは特に問題なく出番を終えたが、俺は違う！あのとんでもない最終回を覚えてるか！？」

丁寧に嘘予告まで準備した隙の無いストーリー！」

「で、君は結局何が言いたいんだい？」

「俺はストーリーでこけたから大丈夫だ」

「ええと、どういう意味？」

「いちいち言わないといけないのか、宇佐見。いいか、あいつは欠点の無いチート。俺は欠点のあるチート。俺の方が親しみ持てるだろ」

士は自信ありげに言う。

「あー、この際チートは置いときましょう。今は幻想郷の事考えましょう」

「尺取って置きながらあっさり流すね。ベリー君」

「誰がベリーよ」

「ベリーって何かおいしそう。ね、士」

「今度食ってみろ」

「コホン。えー、幻想郷ってよく楽園ってフレーズが使われるけど皆はどの辺が楽園だと思う?」

メリーがそう尋ねた瞬間、空気が固まった。重く、息苦しい空気だ。

「おい、宇佐見。お前何か言え」

士が蓮子に顔を近づけ耳打ちする。

「無理よ。メリー、何か無い?」

「ええと・・・お願い、大樹」

「えゝ・・・頼む、士」

「おい、宇佐見頼む・・・」

「えーっと、妖怪とかがいて・・・」

「その何処が良いんだい？」

「蓮子、落ち着いて。私達狩られる側よ」

「じゃあメリー、お願い」

「あー、大樹に任せたわ」

「スタジオ」

「何だか無限ループに突入しましたね」

「何が楽園かは人それぞれだ。それに彼等は多くの世界を旅しただけあってそう簡単には言えないだろう。だが、いつか自分の世界が楽園だと言い切れる様になるのが一番良いのではないだろうか」

「いや、だから貴方は何で良い感じで終わらせようとしてんですか」

「次回から新レギュラー登場だ。期待していてくれ」

「司会の座は渡さんぞー！」

File・03 共演、青空を飛ぶ巫女

「何で当然の様に居座っているんですか!？」

「キヤークササイズ」

「そんなことはどうでもいいんです」

「人生の卒業式」

File・03 共演、青空を飛ぶ巫女

- 光写真館 -

「ふー・・・落ち着け。俺は世界の破壊者だ。ルーレットで8を出すなんて楽勝だ。大丈夫、自分を信じろ」

士はルーレットに手を添え、ぶつぶつ呟きだす。

士達四人は人生ゲームをしていた。家庭用ゲーム機ではなく、ボードゲームの物だ。

「なーにさつきからぶつぶつ独り言言ってるのよ。こういうのは適当にやれば良いのよ。
ほら、私がやったげるから。」

そう言つと蓮子は士の手を払いのけ、勝手にルーレットを回す。

「あつ、こらっ、宇佐見！」

「はい、士は左側の人に五千払う」

「ごめんね、門矢君」

メリーは士の隣にあるお金に手を伸ばし、五千ドル分のお札を掴む。しかし、士はメリーの腕を掴み引き止める。

「待て、今のは無効だ。払うにしても払うのは勝手にルーレットを

回した宇佐見だろ」

そう言つて土は蓮子のお金を掴む。

「ちょっと、勝手に取らないでよ！」

蓮子は土の手を掴みお札を取り返そうとする。

「離せ、お前の自業自得だろうが！」

「土がいつまでもグズグズしてるのが悪いんじゃない」

「ちょっと大樹、どさくさに紛れて私のお金取らないでよ」

「失礼な。僕は盗むなら一万を盗む」

「五万盗んでるじゃないの！」

・スタジオ・

「人生ゲームか、懐かしい」

名護が過去を振り返るかの様に目を閉じ、腕を組む。

「思い出すほど懐かしい。昔はよく家族で遊んだものだ」

「こついうのって、大人数ですから楽しいですね」

「ちょっと待ったー!!」

霖之助が机をドンと叩く。

「貴女、何自己紹介無しで当たり前のように居座っているんですか！」

霖之助が名護の隣にいる人物を指差す。

そこには前回までいなかった永江衣玖がいた。

「名護さん、彼に話を通してなかったんですか？」

「いや、きちんと前回話したはずだ。彼の記憶力に問題があるだけだ」

「さらっと酷い事言わないで下さい。全く今まで以上にくだびれないといけなくなるじゃないですか」

「その心配はない」

「ま、まさか・・・真面目にやってくれるんですか!？」

「君の負担を減らすために次回も新レギュラーが追加される」

「負担が増えるだけだー!」

「それでは本題に入りましょう」

「司会の仕事奪われた!？」

- 光写真館 -

「で、僕達は何すればいいんだい？」

海東が皆に尋ねる。

「まあ、タイトル通り共演してもらうしかないだろ」

「じゃあゲストに来て貰いましょう。今回のゲストは・・・博麗霊夢、五代雄介です！」

蓮子がそう言うと、向かいのドアから霊夢と雄介が入って来る。

「皆、今日は宜しく。多くの人が笑顔になれる回にしよう！」五代は言い終わると、四人に向けてサムズアップをする。

「何度見ても爽やかな気分になるわね。五代のサムズアップは」

蓮子は首を縦に振りながら言った。

「ねえ、私もいるんだけど」

霊夢が、機嫌が悪そうに言う。

「ああ、ごめんね。忘れてたよ」

海東はやる気なさげに謝罪の言葉を言う。

「で、今回は何すりゃいいんだ？」

「さあ？メリー、知ってる？」

「共演シリーズはライダーと東方からそれぞれ一人ずつゲストを呼んで、その共通点を探したりする企画らしいわ」

「じゃあ早速始めよう。何か判るかい？」

「俺が答えてやる」

士が自信ありげに言う。

「じゃあ言ってみてよ」

蓮子が士に催促する。

「まずクウガは漢字で書くと空我。そして霊夢の能力は空を飛ぶ程度の能力。つまり空繋がりだ」

「空を飛ぶ程度の能力は、単純に空を飛ぶだけでなく、何物にも縛られないという意味もあるらしいね」

「夢想天生の力はそんな霊夢の性格を表しているのかもね」

蓮子がそう言うと、メリーが何かを思い出すかのように手を叩く。

「クウガもアルティメットフォームになると凄いのが使えるわね」

「超自然発火能力だね」

「あれはどういう原理で燃やす訳？」

「対象の原子をプラズマ化させて炎上させるらしい」

士がそう言うと、蓮子は満足げな表情で頷いた。

「いやー、二人とも強いよね」

「いや、俺はそんな立派な人間じゃないよ」

「別にどうでもいいわ」

雄介は謙遜するが、霊夢は興味なさげに答える。

「性格は大分違うようだな」

「ダグバと五代並に正反対だね」

海東の発言に雄介が答える。

「そうだね、何でだよ、って位全然違ったし」

「ダグバといえはあの真っ白の体が印象的ね」

蓮子はメリーをチラッと見つめながら言う。

「そっいえば二人合わせるとピッタリ白黒だな」

「白黒といえば魔理沙も白黒だな」

士が続けて喋る。

「紅白と白黒ってまるで正反対の組み合わせだな」

「別に私は魔理沙とコンビじゃないわよ」

霊夢は即座に否定する。

「でもアレね、紅白と白黒。合わせて使える行事無いかしら？」

蓮子は士を見ながら言う。

「まあ、卒業式は紅白。葬式は白黒って決まってるもんだ」

「何とか一緒に出来ないかな」

海東がそう言うのとメリーが喋りだす。

「人生の卒業式」

「……は？」

三人は同時にメリーに聞き返す。

「だからね、この世からはお別れだけどそれと同時に輪廻への旅の始まりじゃない。だから人生の卒業式って」

「あー、ベリー君。一つ言ってもいいかな？」

「何かしら？」

海東は咳ばらいをして、少し間を空けて話し出す。

「君の言いたい事をまとめると、結局はただの葬式になるから」「ですよー」

「スタジオ」

「名護君、貴方の葬式には必ず行きますから」

「衣玖。そういう話を本人の前で言わないでくれ」

「じゃあ卒業式は行きますね」

「もう終わっている」

「何か、クウガと霊夢の話を残してないような・・・」

霖之助は思わず呟いた。

- 光写真館 -

「よし、最後の締めに皆でサムズアップしよう!」

五代がそういうと、全員が一列に並ぶ。

「よし、じゃあ、せーの」

「「「「「皆、笑顔に」」」」」

士の合図とともに全員がサムズアップをする。

「ねえ、私雄介の手のせいで顔隠れてんだけど」霊夢の眩きは誰の耳にも入らなかった。

File・04 共演、どっちもスカーレット

「紅渡特製スペシャルパスタです」

「「それ食ってもいいかな？」」

「バイオリンなんか辞めてやるよー!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0623k/>

【東方×仮面ライダー】オールキャラスーパースピンオフ

2010年10月10日16時29分発行